

4 新規参入地鶏養鶏場の歩みと連携した家畜保健衛生所の取り組み

県央家畜保健衛生所

甲斐 崇	仙波 裕信
竹前 愛子	太田 和彦
原田 俊彦	前田 卓也

はじめに

当所管内の鶏飼養状況は、県内飼養戸数99戸のうち76%、羽数約120万羽のうち93%を占めており、そのほとんどが採卵鶏である。今回管内において県内でも珍しい新規参入の地鶏養鶏場が開設され、当所が現在まで農場と連携しながら衛生管理の向上に取り組んできたのでその概要を報告する。

農場概要

1 現在

現在の農場の飼養羽数は約2千羽で、鶏舎は4棟、従業員はパートタイマーを含めて3名である。鶏種はシャモの交雑種を初生で導入し約5ヶ月齢で出荷している。また、鶏舎の配置は図1のとおりで、農場西側にA、C棟と事務所があり、それより一段下にD、E棟が配置され、周囲は畑に囲まれている（図1）。

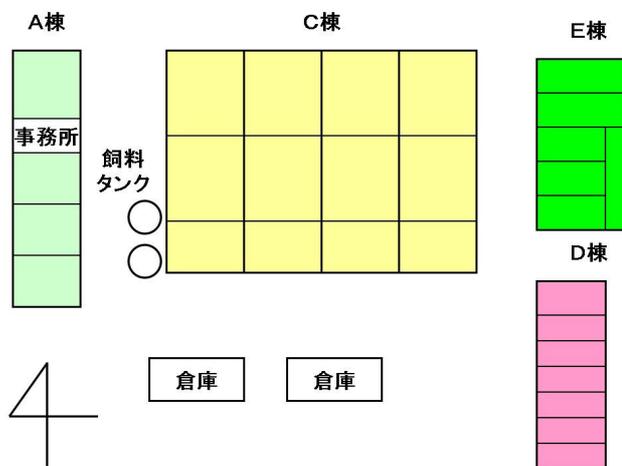


図1 現在の鶏舎配置

2 参入当初

農場は、今から約5年前の平成18年1月に新規参入し、横斑プリマスロックを主体にふ卵から自家育成し、飼育を開始した。当時約300羽程度からスタートし、将来的に約1,000羽程度まで増やし、地鶏ブランドとして立ち上げる計画をもっていた。

新規参入時には当所に衛生的な助言を求められ、ワクチン接種の必要性と方法や鶏舎消毒の方法

等、基本的な衛生管理やワクチン接種の方法を指導した。育成状態については個体のバラツキ等があったものの、問題もなく順調に経過した。

検診事例①

飼養開始から2年ほど経った平成20年6月、眼の周囲に腫脹がみられ、失明する鶏が散見されたため、当所で検診を実施した。発症鶏では眼瞼の腫脹の他、眼の周囲にチーズ様物もみられ、飼料摂取不足のため死亡する鶏も見られた（写真1）。

病性鑑定の結果、POXウイルスやパスツレラの感染、回虫等の寄生がみられた。対策として敷料の交換、消毒、空舎期間の設定やサルファ剤の投与等を指導した。



写真1 眼の腫脹

改善の取り組み

この検診事例をきっかけに、経営者や従業員は危機感を持ち、今後の対策を検討するため、当所で打合せ会議を開催し、問題点をチェックした上で衛生対策を行っていくことを確認した。

問題点として、①ふ卵器の不完全な消毒。②ロット管理が不徹底で別ロットの鶏が混在。③飼養規模が2年前の300羽から2,000羽近くまで増え、空舎期間もなく、全ての鶏舎に常に鶏が入っている状態。④鶏舎の壁や間仕切りにトタンを使用しており、換気が不十分。⑤床が一部土間で、洗浄消毒が十分にできない構造等を確認した。

これら問題点を踏まえて、①管理の難しさや肥育管理へ労力を集中するため、ふ卵業務の廃止。②親鳥と雛を廃用し、育成鶏は順次出荷。③給水施設をトイからニップルに変更する等鶏舎の改造。④オールインオールアウトの徹底等を実施した。また、これをきっかけに衛生管理についてもアドバイスを行い、これらをひとつずつ改善した。



写真2 改善事例

衛生管理では、消毒マットを各鶏舎入り口に設置し、履き物や作業着を区分した。また、農場入口や各鶏舎入口にも立入禁止の張り紙を設置した(写真2)。防鳥ネットもきめ細かく張り、踏みこみ槽の石灰も各鶏舎の中と外に設置し、鶏舎毎の専用長靴も設置した(写真3)。各ロットの管理を徹底するため飼養管理チェックシートを作成し、温度管理、健康チェックを実施した(写真4)。各鶏舎には温度計を備え、履き物



写真3 改善事例



写真4 改善事例

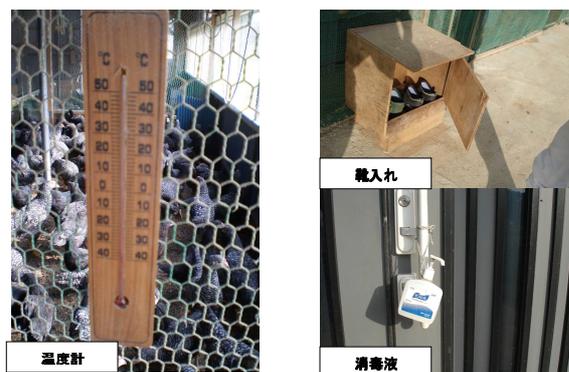


写真5 改善事例



写真6 改善事例

は雨風で汚れないように専用の履き物入れを作成、また、各鶏舎には手洗い用の消毒液を設置した(写真5)。床をコンクリートにする等鶏舎構造を改築し、ニップル式の給水器に変更した。また、鶏舎の壁や間仕切りを金網にし、換気を良くした(写真6)。

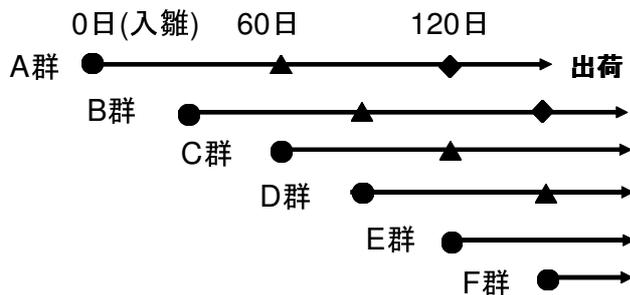


図2 ワクチン接種計画

種を行うようにした。これにより、毎月の入雛とワクチン接種が関連づけられ、ワクチン接種が習慣化することができた。ワクチンの飲水投与に使用する水は塩素抜きの手間がかからなく、計量が楽なミネラルウォーターを使った。

このような改善の結果、飼養環境が良好になり、発育成績も順調になった。近年では約2,000羽程度の平均飼養羽数で管理を行っている。

また、ニューカッスル病ワクチンの接種については、以前、複数回の接種を指導していたが、ワクチン液のロスの問題などがあり、1回の接種で終わっていた。しかし、これでは抗体が十分に持続しないことから、着実に接種を行えることを最優先に考え、毎月の定期的な接種で手間のかからない方法を考案した。

図2の様に、月1回入雛が行われるその日に初生雛に接種を行い、同時に他の群の追加接種

検診事例②と再確認

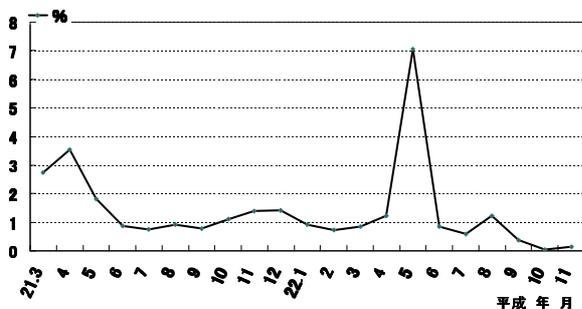


図3 死亡率の推移

改善後の農場での死亡率の推移は図3のとおりで、1%前後で推移していたが、平成22年5月に死亡羽数の増加がみられ検診を行った。

新たに肉用ではなく採卵鶏を導入したところ、導入から10日後位から眼の充血や呼吸器症状を呈し死亡する鶏がみられ検診依頼があった。採卵鶏では眼瞼浮腫を認める鶏がみられたが、肉用の地鶏には異常がなかった。

病性鑑定の結果、インフルエンザ簡易検査陰性、OPG2, 300、ウイルス分離陰性、眼の周囲のチーズ様物から *Pasteurella gallinarum* が分離され、気管と肺にリンパ球の浸潤が認められたが、その他に著変はなかった。

このことから、今回の事例は飼育密度の上昇、気温の変化等様々な要因が複合的に重なり、発症したものと考えられた。また、このことから再度衛生管理を見直し、適正な飼養密度を維持、採卵鶏の

導入中止、鶏舎の消毒の徹底を行った。鶏舎消毒には床面をコンクリート打ちにしたこともあり、熱湯による消毒も行い、寄生虫対策も併せて実施した。急激な環境の変化はストレスにつながることから、導入に際しては細心の注意を払うこと、死亡鶏が多い場合は当所にすぐに連絡を行うことを確認した。さらに、抗体検査でワクチン抗体のバラツキがみられたことから、ワクチン初回投与日齢の変更も行った。

まとめ

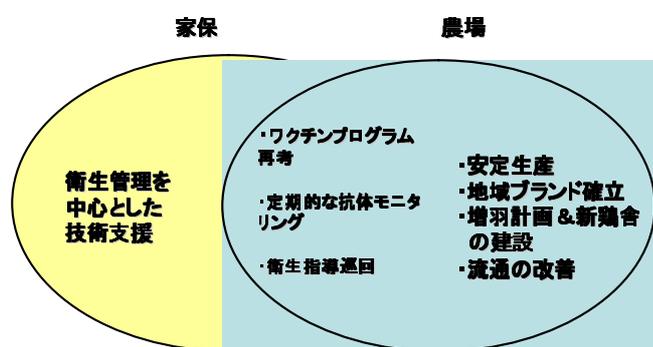


図4 今後の連携

農場では開設当初特段問題はなかったものの、羽数が増えるとともに問題が散発した。その都度、衛生管理の重要性を再認識し、当所とともに衛生管理のチェックを行い、自らも工夫を加え実践した。その結果、管理のしやすい鶏舎や作業方法に改善することにより、疾病の発生を効率よく予防し、飼育成績の向上を図ることができた。近年では、取引先が増加し品不足になることもあり、農場では飼養羽数の拡大を図り

たいと考えているが、今までの経験を踏まえ、現在の施設での飼養羽数の増加が疾病の発生につながっていたため、様子を伺っている。

現在、農場では飼料米を利用する等新しい取り組みを積極的に行っている。今後の目標として、安定的な生産を行い、地域のブランドとして確立させ需要に応えるため増羽を行う計画がある。また、生産から販売まで一貫で行える流通方法の改善に取り組むこと等も計画している。

当所としては、今後の衛生管理面での課題として、高いワクチン抗体価の維持が考えられるので点眼接種や頻回接種に切り替えるなど、状況をみながら今後も問題点があれば、よりベストな飼養管理ができるように指導を継続していく。